

お尻が揺れ、量感のある太腿がうごめくたびに、興奮のあまり赤く染まったクリトリスがチャンバラのように打ちつけられている様子が見える。

より扇情的だったのはまひるのお尻だった。形よく引き締まった量感のある双臀の谷間で、セピア色のシワヒダをいっぱい集めてすばまったアヌスが、イソギンチャクの口のように、すばまったりひろがったりを繰り返す。さつき、指を入れたときの、熱したゴムのような感触も、美樹の好奇心を煽^{あお}った。

——アナルセックスって、どんな感じなんだろう……。

だが、まずは二人の味比べだ。そのために重なり合ってもらったのだ。二組の太腿のあいだから、秘部が二つお団子になっている様子は、恐ろしくエロティックだ。

こうして見比べていると、二人の女陰の形の違いがハッキリわかる。まひるのほうが、クリトリスは大きくて長い。だが、沙亜耶のクリスは、小さいわりに硬いようで、まひるの陰核が沙亜耶の秘芽に押しあげられるたび、痛そうに歪^{ゆが}む。

秘唇は、二人ともぷっくりしてかわいいが、さつきセックスしたぶん、沙亜耶のほうがスリットがほころんでいやらしい雰囲気になっていた。

美樹は、少し迷ったものの、まひるから先にすることにして、幼なじみのお尻の脇をしつかりと持った。そして、スリットに亀頭を合わせて前後に振る。まるでペニス



を吸いこもうとするかのように、膣口がヒクつく。

「あつ、あんつ、美樹いつ、だめえ……」

もっと粘膜をこねくって、さんざん焦らして、いっぱいおねだりさせてから挿入しようと思っていたのに、エッチな二人の姿を見て我慢できなくなってしまった。

美樹は、まひるのアヌスを観察しながら、膣口に亀頭をズブリと突き入れた。

「あんつ、美樹い……いいつ、き、気持ちいいのお、奥まで入れてえ……」

沙亜耶がはっとしてまひるを見た。沙亜耶の位置からでは見えないはずだが、なにが起こっているのかは心配でわかるのだろう。

まひるは沙亜耶の動揺に気づかないのか、気づいていながら無視しているのか、むさぼるように唇を合わせた。そして、女同士の執拗なキスをつづけていく。

エラが張った亀頭がみっしりと粘膜を集めて閉じている秘口をこじひろげ、ムリやりな強さで奥へ奥へと進んでいく。

「あつ、美樹、いいつ……あうつ、うつ……」

「あんつ、わ、私も、欲しいよおっ……」

まひると沙亜耶が交互に声をあげる。沙亜耶がカクカクと腰をあげた。クリトリスはまひるのほうが大きいが、沙亜耶の小さくて硬い陰核がピンポイントで押しあげる

感触がたまらないようだ。

「ひゃうんっ!! だ、ダメっ、さ、沙亜耶ちゃんっ、しちゃダメえっ! 感じすぎるうっ」

「まひる、い、痛くないのか?」

「うん、ぜんぜんっ。あんっ、んんっ、いいよおっ、気持ちいいいっ……」

まひるは甘い声をあげて身体をくねらせた。

破瓜^{はか}のときの苦痛は、二度目の今はまったくなかった。こんなにたくましくすばらしいものをあたえてもらった喜びに、身体の芯が甘く疼く。

「気持ちいいよ……美樹い……」

沙亜耶と重なり合った状態で挿入されているせいか、ことのほか被虐感が強い。

美樹はまひるのずっと上に立つ神様で、まひるはこのすばらしい男神にひれ伏すために生まれてきたのだとまで思ってしまう。

それでいて、美樹が沙亜耶よりも早く挿入してくれたことで、上級生に勝ったというような、爽快な気分を覚えていた。

身体の芯に重い刺激がコツンと走り、亀頭が子宮口を突きあげた。全身がふるえる

ようなズウンと重い衝撃が走る。

「気持ちいいっ！」

声に出してはじめて気づいた。

——あつ。そうなんだ。これって快感なんだっ。

まったくはじめての刺激なので、初体験のときはなにがなんだかわからなかった。飛ばされそうな錯覚に襲われて、イクと叫んでしまっただけだ。

だが今は、これはオーガズムだとはつきりわかる。ティーンズ雑誌で読んで、こういう感じなんだろうとぼんやりと考えていた快感が、今、まひるの身体を襲っている。「あつ、ううっ……あつ！ あんっ、ああ、あつ!!」

キュウウツと下腹が絞られるような、苦痛に近い快感がまひるを襲う。暴力的なほどに鋭い感触に、甘い声をあげて悶えてしまう。

「美樹、好きよ……私は、ぜんぶ、美樹のものだよ……美樹は私に、なにをしてもいいの……私は美樹の、奴隷なのよ」

美樹が息を呑む気配がした。

だが、美樹が硬直していたのは一瞬で、思い直したように双臀の脇を持ち直すと、ドストスと腰を打ちつけてくる。

「僕も、好きだよっ、まひるっ」

膣ヒダの壁をこそげ落とすのではないかと思うほどの迫力に、まひるは身体全体をガクガクさせて律動を受けとめた。

下腹の奥がキュンキュンする。せつなく疼くそれは、苦痛に似ていたが、もっと甘く強い。

——なんでこんなところがキュンキュンするの？

——あつ。これ、子宮だつ。私、子宮が疼いているんだっ！

沙亜耶とくっつけ合わせている乳房の内側も、子宮に連動して甘痛く疼きはじめる。「やんっ、まひるちゃんっ、だ、だめえっ、そ、そんなにしちゃダメっ。わ、私、ヘンになるよおっ」

まひるの下敷きになっている沙亜耶が悲鳴をあげる。まひるが身体を揺らすたびに、沙亜耶の両の乳首と秘芽が引つ張られる。それは、沙亜耶にとつては、まひるに犯されていても同然で、悲鳴をあげて悶えずにはいられない。

火照った秘唇に、美樹の冷たい陰囊いんのうがぺちつと当たって離れる感触さえも感じてしまふ。

「美樹くうんっ、私も、あああああつ、私も欲しいのおっ!! 私も」